

(人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針に則る情報公開)

このたび以下の研究を実施いたします。本研究への協力を望まれない場合は、問い合わせ窓口へご連絡ください。研究に協力されない場合でも不利益な扱いを受けることは一切ございません。

本研究の研究計画書及び研究の方法に関する資料の入手又は閲覧をご希望の場合や個人情報の開示や個人情報の利用目的についての通知をご希望の場合も問い合わせ窓口にご照会ください。なお、他の研究参加者の個人情報や研究者の知的財産の保護などの理由により、ご対応・ご回答ができない場合がありますので、予めご了承ください。

【研究計画名】 新規タウオパチー治療剤開発のためのモデル作製および薬効評価

【研究責任者】 国立精神・神経医療研究センター病院 臨床検査部 高尾 昌樹

【本研究の目的及び意義】

アルツハイマー病 (Alzheimer disease; AD) の疾患修飾薬の開発については、老人斑の主要構成成分であるアミロイド β を標的とする薬剤の開発が行われてきましたが、さまざまな問題から未だ実用化されるまでには至っておりません。ADにおけるもう一つの病理学的特徴である神経原線維変化(neurofibrillary tangle; NFT)は、過剰にリン酸化されたタウ蛋白質の細胞内沈着物で構成されており、その病変の程度は認知機能の低下と良く相関することが知られています。近年、ADのみならずタウオパチーにおいて、このタウ病変の進展に細胞間の伝播が関与するとの仮説が提唱されており、タウの凝集あるいは細胞間の伝播の阻害が新規タウオパチー治療メカニズムとして期待されています。

タウの伝播については、凝集させたりコンビナントタウをシードとし、培養細胞やげっ歯類の脳においてタウの細胞内凝集体形成を生じさせることが可能となっています。しかし、最近になって、この様な人為的に凝集化させたタウとAD等の疾患脳由来のタウでは、凝集体の構造や伝播効率、生じる病理が異なることが報告されており、薬剤開発においても、ヒト由来サンプルを利用したモデルを用いた薬効評価の重要性が示唆されています。

本研究は、より臨床像に近いタウオパチー病態を再現できる疾患モデルとして、タウオパチー脳組織から調製した可溶性もしくは不溶性画分をシードとしたモデルの構築を行い、構築したモデルをタウオパチー治療薬候補物質の薬効評価に使用することを目的としております。

【本研究の実施方法及び参加いただく期間】

対象となる方

2009年4月以降2022年3月までに国立精神・神経医療研究センター病院で病理解剖され、NCNPブレインバンクでの剖検検体の保管および研究使用に関して同意された方のうち、死後の病理診断により大脳皮質基底核変性であると判定された方。

利用する試料・情報等

試料： 大脳皮質基底核変性症の凍結脳組織

情報等： 年齢、性別、死後時間、診断名、診断情報、病理解析結果

研究期間

研究実施許可受領後より 2023年 3月 31日まで

【共同研究機関】

エーザイ株式会社 研究責任者 田口良太

○問い合わせ窓口

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

所属 病院 臨床検査部 病理検査室 氏名 高尾昌樹

電話番号 042-341-2711(代表)

○苦情窓口

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター倫理委員会事務局

e-mail: ml_rinjimu※ncnp.go.jp (「※」を「@」に変更ください。)